

古文 読解の重要知識 まる見え1枚シート

点が動く読み解きの「型」を厳選。ここを見たら勝ち。設問は「文法の型」を知っているかで差がつきます。重要な順に並べたので、上から覚えれば実戦で効きます。

- ★★★ 入試超頻出
- ★★ よく出る
- ★ 余裕があれば
- 💡 覚え方
- ▶ 例文

- ① 助詞「ば」
- ② 係り結び
- ③ 主語の交代
- ④～⑥ 敬語 (方向・最高・給ふ)
- ⑦以降 細かい識別・読みで詰める

※ 上から順に身につけるのがおすすめ。前半(①～⑥)で「誰が・何を・どう言ったか」と敬語による人物関係をつかみ、後半は設問でよく問われる細かい識別・読みの仕上げ。

読む順：左の列を上から順に ▶ 終わったら 右の列へ (見出しの番号が順番です)

1 助詞「ば」 — 未然+ば=仮定/已然+ば=確定

読解で最初に効く知識。直前の活用形を見るだけで意味が決まります。「もし～なら」か「～ので～と」かで訳が真逆になります。

形	接続	意味	訳し方	頻出
未然形+ば	未然形	仮定条件	もし～なら/～たら (=if)	★★★
已然形+ば	已然形	確定条件	～ので/～すると (=because)	★★★

💡 未然形+ば=if (もし～なら) / 已然形+ば=because (～ので)。直前がア段(未然)なら仮定、エ段(已然)なら確定。

💡 古文で「もし～なら (if=仮定)」になる形は3つ：① 未然形+ば / ② 未然形+「ず」+は (～ずは=もし～ないなら) / ③ 「む」+係助詞 (～むは、～むに=もし～なら)。

▶ 例文：花咲かば(未然) → 「もし花が咲いたら」(if) / 花咲けば(已然) → 「花が咲くので」(because)

2 係り結び — ゴ・なむ・や・か→連体形/こそ→已然形

文中に係助詞があると、文末の活用形が変化します。文末を探す目印になり、訳の調子(強調・疑問・反語)も決まります。

係助詞	結び(文末)	意味	頻出
ゴ・なむ	連体形	強調(訳に出さなくてよい)	★★★
や・か	連体形	疑問「～か」/反語「～だろうか、いや～ない」	★★★
こそ	已然形	強調(やや強い)	★★★

💡 「や・か」=疑問文の目印 / 「こそ+已然形」=逆接 / 「もゴ・もこそ」=危惧。
① 古文に「？」はないので、文中・文末の「や・か」は疑問・反語のサイン(～か? / ～だろうか、いや～ない)。
② 「こそ」+已然形でいったん切れず下に文が続くと逆接(～だが、～けれど)。
③ 「もゴ・もこそ」は危惧「～すると困る・大変だ」(例：雨も降る=降ったら困る/人もこそ見れ=見られたら大変だ)。

▶ 例文：花こそめでたけれ(已然) → 「花こそすばらしい」

▶ 反語の例：誰か知らむ(連体) → 「誰が知ろうか、いや誰も知らない」

3 主語の見分け — 接続助詞で交代するか見抜く

古文は主語が省略されます。直前の接続助詞で「同じ人が続くか/別人に替わるか」を判断するのが最大のコツ。

主語そのまま(同一)	主語が変わりやすい
て(～して)	を(～のに・～と)
して(～して)	に(～と・～ので)
つつ(～しながら)	が(～が・～のに)
同じ人物の動作が続く合図。	ど・ども(～けれど)
	ば(～ので・～たら)
	ここで別人に視点が移ることが多い(必ず替わるわけではない。あくまで「替わりやすい合図」として確認する)。

💡 「て・して・つつは続く/を・に・が・ど・どもは替わる」。替わる側は頭文字で「をにがどば」とまとめて暗唱。

▶ 例文：(帝、女を)見^てうつくしと思^ふ → 「て」なので主語は帝のまま。 / (帝、女を)召^しければ、(女)参^りぬ → 「ば」で主語が女に交代。

4 敬語の方向 — 尊敬は動作主/謙譲は受け手/丁寧は聞き手

敬語は「誰を高めているか」で人物関係が読めます。種類を見分けければ、主語や目的語の特定にも直結します。

種類	高める相手	代表語	訳	頻出
尊敬	動作をする人	給ふ・おはす・おはします・のたまふ・召す	～なさる/お～になる	★★★
謙譲	動作を受ける人	奉る(たてまつる)・聞こゆ・参る・申す	～し申し上げる/お～する	★★★
丁寧	聞き手・読み手	侍り・候ふ(さぶらふ)	～です・～ます・～ございます	★★

💡 「尊敬=する人、謙譲=される人、丁寧=聞く人」。謙譲があれば必ず「動作の受け手=高めるべき人」がいる、と通算できる。

▶ 例文：(臣下が帝に)文を^奉る → 謙譲。受け手の帝を高める = 「帝に手紙を差し上げる」。

5 二重敬語+絶対敬語 — せ給ふ=最高位/奏す・啓す=相手が固定

尊敬の助動詞「す・さす・しむ」+尊敬語「給ふ」を重ねた形。敬意が二重なので、対象は天皇・皇后・上皇クラスなど最高位に限られるのが原則です。主語当ての強力なヒント。

形	読み解き	頻出
せ給ふ/させ給ふ	最高敬語。主語は天皇・中宮など最高位の人物	★★★
しめ給ふ	「しむ+給ふ」。漢文訓読系の文章で最高位を表すことが多い	★★

💡 「せ・させ+給ふが並んだら、ほぼ天皇か中宮。ただし「せ給ふ」は「使役+給ふ(～させなさる)」のこともあるので、文脈で使役か最高敬語が見分ける。

▶ 例文：帝、いみじう笑はせ給ふ → 「帝がたいそうお笑いになる」。主語=帝と確定できる。

絶対敬語	受け手が必ず決まっている謙讓語	
語	必ずこの相手に「申し上げる」	頻出
奏す	天皇・上皇(院)に申し上げる	★★
啓す	中宮・皇太子(東宮)に申し上げる	★★

💡 「奏す=天皇へ、啓す=中宮・東宮へ」。相手が固定なので、出てきたら受け手の人物が即わかる(主語当ての強力ヒント)。

6 給ふ — 見たら99%「尊敬(～なさる)」

「給ふ」は活用で意味が変わるが、実際に出るのはほぼ尊敬。見たらまず「～なさる」を当てる。

形	意味・正体	頻出
四段「給ふ」	尊敬の補助動詞「～なさる・お～になる」(圧倒的多数)	★★★
下二段「給ふ」	謙讓「～ております。自分が<思ふ・見る・聞く・知る>に付き、会話文に出るときだけ=まれ	★
四段の本動詞	「お与えになる」。これもまれ	★

💡 「たまふ」と見たら99%尊敬の補助動詞(～なさる)。下二段謙讓を疑うのは<思ひ給ふ・見給ふ・聞き給ふ・知り給ふ>が会話文に出たときだけ。

7 ⑥「にや・にか(あらむ)」 — ～であろうか(疑問・推量)

断定「なり」の連用形「に」+係助詞「や・か」+(省略された)「あらむ」。「～だろうか」と訳す定番の省略表現で、多くは筆者・語り手の心の中の疑問・推量(心情)を表します。

形	正体	訳	頻出
～にや(あらむ)	断定「に」+や+あらむ	～であろうか	★★
～にか(あらむ)	断定「に」+か+あらむ	～であろうか	★★
～にこそ(あらめ)	断定「に」+こそ+あらめ	～であるのだろうか	★★

💡 「にや・にかの下に『あらむ』を補えば意味が通る」。文末で「にや」「にか」と切れていたなら、心の中の疑問「～だろうか」。

▶ 例文：物の怪にやあらむ → 「物の怪であろうか」

8 和歌の修辞 — 掛詞・縁語・枕詞・序詞・本歌取り

和歌の設問は「技法を指摘できるか」で決まります。5つを押さえれば取りこぼしません。

修辞	働き	例・特徴	頻出
掛詞	一語に二つの意味を重ねる	「まつ」=松・待つ / 「あき」=秋・飽き	★★★
縁語	関連語を散りばめ連想を作る	糸・張る・乱る・絶ゆ(糸の縁語)	★★
枕詞	特定語を導く主に5音の飾り(訳さない)	あしひきの→山/ちはやぶる→神	★★★
序詞	ある語を導く前置き(多く7音以上・訳す)	具体的な景から本題の語へ導く	★★
本歌取り	有名な古歌を踏まえて詠む	元歌を知っていることが前提	★

💡 「枕詞は多く5音で訳さない/序詞は多く7音以上で訳す」。掛詞はひらがな表記の語が怪しい(同音で二意)。

▶ 例文(掛詞)：花の色はうつりにけりな…「ながめ」=「眺め」と「長雨」を掛ける(小野小町の歌)。

9 文中の「む」「べし」 — む=婉曲・仮定/べし=強い推量・当然

「む」「べし」は文末か文中かで意味が変わります。文中(連体形で名詞に続く)の「む」は婉曲・仮定になりやすい。

む(文末→文中)	べし
基本は推量・意志(will)「～だろう/～しよう」	推量(強い)「～にちがいない」
む+体言(連体形で名詞に続く)=婉曲「～ような」(英語のlike+名詞)	当然・義務「～べきだ・はずだ」
む+係助詞(～むに・～むは)=仮定「もし～なら」	意志「～しよう/可能「～できる」/命令「～せよ」
適当・勧誘はほとんど出ない	「む」より強く確信・必然のニュアンス。
「～む人」「～むこと」は婉曲。	

💡 む=主観的な推量・意志/べし=客観的・根拠のある推量。「むの下に名詞→婉曲」。べしの意味は「スイカ止め(推量・意志・可能・当然・命令)」で覚える。

▶ 例文：言はむ方なし → 「言いようがない」(婉曲)。 / 行くべき道 → 「行くべき(当然の)道」。

10 呼応(陳述)の副詞 — 下の打消・禁止とセット

特定の副詞は、文末の打消・禁止とセットで意味が決まる。副詞を見たら下を探す。

副詞	下に来る語	意味	頻出
え～	打消(ず・じ等)	～できない(不可能)	★★★
な～そ	間に動詞の連用形	～するな(禁止)	★★
つゆ・さらに・たえて～	打消	まったく～ない	★★
をきをき～	打消	ほとんど～ない	★

💡 副詞を見たら文末の打消・禁止を探す。「え+打消=できない」「な～そ=するな」「つゆ・さらに+打消=まったく～ない」。セットで覚える。

▶ 例文：え言はず → 言うことができない(不可能)。 / な散りぞ → 散ってくれるな(禁止)。

11 死・出家の婉曲表現 — 直接書かず遠回しに言う

古文では「死」や「出家」を直接書かず、遠回しに表します。これを知らないと文脈を読み違えます。下の死の表現は、おもに「亡くなる」の意になり得ます。

表現	意味(おもに=死ぬ)	頻出
かくる(隠る)	お隠れになる= (高貴な人が) 亡くなる	★★★
はかなくなる	あつげなく亡くなる	★★
むなしくなる	(亡骸だけになり) 亡くなる	★★
いふかひなくなる	言うかひもない状態になる=亡くなる	★★
失す(うす)/消ゆ	いなくなる・消える=亡くなる	★★

💡 「隠れる・はかない・むなし・言うかひない=みんな死」。これらが出たら、人物が亡くなった場面を疑う(「失す・消ゆ」は文字どおり消える意のこともあるので文脈で判断)。

▶ 例文：中宮、つひにかくれさせ給ひぬ → 「中宮はとうとうお亡くなりになった」。

出家を表す表現	意味(=出家する)	頻出
世を捨つ・世を背く・世を遁る(のがる)	俗世を離れる=出家する	★★
さま(様)を変ふ・かたちを変ふ	姿を変える=出家する	★★
髪をおろす・御ぐし(みぐし)おろす・やつす	剃髪して出家する	★★

💡 「世を捨つ・さまを変ふ・髪をおろす=出家」。死と同じく直接言わない。文脈で「死」か「出家」かを見分ける。